

# ラワン語の再帰接辞-shìに関する一考察

東京外国語大学大学院 大西秀幸

## 1. 導入

「中動・再帰」について、類型論の観点からアプローチした Kemmer(1993)は、(直接)再帰の標識が典型的には、「行為の動作主と対象が同一の指示対象である。」ことを示すと指摘している。それに対して中動の標識は、自分自身で起こす事象(行く、歩く、飛ぶ等)、身体姿勢の変化(横たわる、座る、立つ等)、移動を伴わない動き(捻る、お辞儀する、伸びる等)、身づくろい(洗う、着飾る、ひげをそる等)を表すと指摘している。そして両者は当該の行為を為す指示物とそれを受ける指示物が同一という点で類似している<sup>1</sup>。こういった特徴を共有することから、両方の概念が一つの形式によって表される言語も少なくない。チベット-ビルマ語派の言語であるラワン語もその一つである。

(1) yā mē shət -shì -ē.

それ 女性 殺す -shì -NPST

「その女性は自殺した。」

(2) rəwàng mē -rā ənásō sō -shì -ē.

ラワン 女性 -PL 耳飾り つける-shì -NPST

「ラワンの女性は耳飾りをつけている。」

(1)は動作主と被動者が同一指示物である事象、(2)は完全に同一の指示でないものの、動作が動作主の身体部位に向かうような事象を表す。-shìは以上のような特徴から、先行研究で「中動・再帰」的な意味を実現する接尾辞として指摘されてきた。しかし、-shìで標示される文のすべてが Kemmer の指摘する典型的な特徴を示すわけではない。本発表では、-shìによる標示をうけながら「再帰らしさ」がコード化されない表現に着目し、-shìが本来的にはどんな機能をもつ接辞なのかを探る。

ラワン語<sup>2</sup> (Rəwàng) はミャンマー連邦共和国の北部に位置するカチン州で話される言語で、話者人口については 63,000 人: Ethnologue<sup>3</sup>) という数字が挙げられている。発表者が接触したラワン語話者はす

<sup>1</sup> 再帰と中動の間には類似点もある一方で、中動態の事象は、行為の始点となる指示物と行為の終点としての指示物が再帰事象ほど独立していない(身体部位や所有物等)点で直接再帰の典型と異なる。そのため、両形式を、別々の形式で表現する言語もある。Kemmer(1993)では再帰/中動を一つの形式で表す言語を one-form language、別の形式を用意している言語を two-forms language と呼んでいる。

<sup>2</sup> 本発表におけるラワン語の表記は、発表者が行った音韻解釈に基づく音素表記である。以下に示しておく。子音音素は / p[p<sup>h</sup>], b[b], t[t<sup>h</sup>], d[d], k[k<sup>h</sup>], g[g], ?[ʔ], ts[ts-s], z[dz-z], ch[tʃ], j[dʒ], s, sh[ʃ], m, n, ng, l, w, r[r], y[j] / の 20 種、母音音素は / i, e, a, ə, ø, o, u / の 7 種、母音の連続は基本的にないが、借用語においてのみ現れることがある(例 poi < ビルマ語)。超分節音素(声調)は 低(À)、中(Ā)、高(Á)の 3 種、声調の対立は開音節及び鼻音、流音で終わる音節においてのみ存在する。よって閉音節においては調類の表記は行わない。頭子音連続には Cl, Cw, Cj, Cr のパターンが見られる。詳しい音韻解釈については大西(2013)を参照されたい。

<sup>3</sup> ラワン語話者はインド側にも存在し、ミャンマー側に限ると 62,000 人というデータが挙げられている。

べて同国の公用語であるビルマ語を流暢に話していた。本発表で対象にするラワン語は、特に北部を分布域にもつダル方言である。本発表で用いる一次資料は、発表者が 2013 年 1 月と 3 月にミャンマー連邦カチン州の州都ミッチーナ市に渡航し、調査により収集したものである。調査に協力して下さったのはミッチーナ市在住の元大学教員 Diji 氏 (1949 年生) である。同氏はカチン州北部の Nogmun 市の出身である。調査の媒介言語はビルマ語を用いた。本発表で挙げる例文は、特に断りのない限り、発表者の調査によって収集されたものであり、グロス、例文の訳、外国語文献の日本語訳についてはすべて発表者の責任で行っている。

## 2. 先行研究

現在あるラワン語に関する研究のほとんどは正書法の元にもなっているマトワン方言を対象にしている。ここでは -shi のマトワン方言における同源形式に関する記述を参考として挙げる。-shi についてある程度、詳細に記述した研究として、LaPolla(2000)が挙げられる。以下、LaPolla(2000)の記述を要約する。まず、統語的な特徴に着目すると、-shi によって標示された動詞は必ず自動詞タイプの屈折を受け、動作主を指示する名詞句が動作主格-i で標示されることはない。つまり、-shi は自動詞文にしか生起しない。

### (3) a. 他動詞文

àng -í      àng    ədip -ò      -ē.  
3SG -AGT   3SG   打つ-TNP   -NPST

「彼はあの人を殴る。」

### b. 対応する-shi 文

àng    àng    ədip -shi -ē.  
3SG   3SG   打つ-shi -NPST

「彼は自分自身を殴る。」 (LaPolla 2000: 292)

次に、意味に着目した場合、-shi の用法は 3 つに大別できる。

- ① 直接再帰的な用法
- ② 対象が動作主の身体部位、或いはある種強いつながりのあるものであることを示す用法。

(4) a. àng    təwàn    əcha'    -ò      -ē.  
3SG    雪       落とす   -TNP   -NPST

「彼は雪を履き落とす。」

b. àng    təwàn    əcha'    -shi    -ē.

3SG    雪       落とす   -shi   -NPST

「彼は自分の体についた雪を履き落とす。」 (LaPolla 2000: 292)

只、shi が使えるのは、対象が動作主の体に触れているものに限られるようである。

- (5) ngà úrhām bè -shi -bú-ì. yālòng zap -ng-á.  
 1SG 指 切る -shi -PFV-PST これ 包む -1SG-TP  
 「私は指を切り落とした。(そして) これ (指) を包んだ。」

③ 事象が動的でなく、状態的であることを強調する。

- (6) a. àng shəm pē -shi -ē.  
 3SG 剣 背負う -shi -NPST  
 「彼は肩に剣を背負っている。」
- b. àng -í shəm pē -ò -ē.  
 3SG -AGT 剣 背負う -TNP -NPST  
 「彼は肩に剣を背負う。」 (LaPolla 2000: 295)

-shiの特徴をまとめると、次の3点を指摘することができる。

- [1] 必ず、自動詞文で現れる。  
 [2] 中動・再帰的な意味をコード化する。  
 [3] 状態性をコード化する。

### 3. 問題点の所在と方針

[3]は再帰の典型からは逸脱する用法であり、「再帰を表す」という視点に立てば「周辺の」に見える。しかし、本来的に再帰的な意味を表す形式ではないという視点に立てば、[1]、[2]、[3]の用法の一般化ができるかもしれない。では、-shiの本来的な機能は何であろうか。発表者の一次資料から得られた例を使って、-shiの標示で、どういう意味が実現されているのかを観察し、結論で-shiの機能について一般的な説明を試みる

### 4. 「再帰らしい」-shi

対象を指示する名詞が動作主と同一（あるいは動作主の一部）という点で、本節であげる例は「再帰らしい」といえる。

- (7) nā =nōr nā è- yàng-shi.  
 2SG =TOP 2SG 2- 見る -shi  
 「あなた自身を（鏡で）見なさい。」
- (8) àng mùgwā -í kup-shi-e.  
 3SG レインコート -INST 被せる-shi-NPST  
 「彼はレインコートを（自分に）着せた。」

動作主の一部というのは、典型的には身体部位を指すが、身体部位でなくとも、動作主に対して位置的に接していれば、-shiが使えるようである。

(9) àng shāmò shēt -shì -ē.

3SG 蚊 殺す-shì -NPST

「彼は（彼の上にとまった）蚊を殺した。」

(7)~(9)はいずれも、参加者が2つ想定でき、他動詞文で表現しえる文である。しかし、(7)~(9)を他動詞文で表現すると、対象は動作主から独立したものと解釈され、同一の事象を言い換えることはできない。つまり、対象は-shìの付加によって、動作主からの独立性を失い、結果、自動詞文になるといえる。

このことから、再帰らしい-shìの機能として、対象の独立性の喪失という一般化が可能である。-shìによって対象は動作主と同一指示物或いは、指示物の一部という解釈を受け、その独立性を失う。対象が独立性を失うことで、他動性が弱まり、事象は自動詞文で表現される。

## 5. 「再帰らしくない」-shì

次に、動作主と対象の間に関係が認められないような、いわゆる「再帰らしくない」shìの用法について観察する。(10)は鉱物資源を掘り出すために、堅い岩盤を掘り進めていくことを示す文である。

(10) (硬い岩盤を掘り進めることが出来なくて、)

kādōwào nīgō sòngmè -dòm dǎlup -shì -ē. wā.

どうやって ドリル -CL 入れる -shì -NPST HS

「どうやれば、そのドリルをさらに中に入れ続けることができるの?と聞いた。」

(10)はドリルで1度穴を開けるということではなく、既に岩石の中に入っているドリルを使って、さらに継続的に掘り進めていくということを表す。

-shìは継続性の他にも習慣性、反復性、恒常性をコード化できる。(11)は、暑い季節を通して出かけるときにはお湯を習慣的に持つておくよう、促す文である。(12)はサンドンが、何度も反復的に材木を運ぶことを表している。(13)は、この一回支払いができないと言うよりも、貧しさのために恒常的に家賃の支払いができないでいることを示している。

(11) nàmlím shēlā -ka' nā tì lím kárægāp è- zīn -shì.

暑い 季節 -LOC 2SG 水熱い 常に 2- 持つ -shì

「暑い季節の間は、お湯をいつも持つておきなさい。」

(12) sándóng mātàngmātàng shòng rì -shì -rà -ē.

PN 頻繁に 材木 運ぶ -shì -[義務] -NPST

「サンドンは何度も材木を運ばなければならない。」

(13) àng dāshādēlā í -ē. wá mǎ-ngut-shì-ē.

3SG 極めて貧しい COP -NPST 支払 NEG-POT-shì-NPST

「彼はとても貧しい。(だから)支払はできていない。」

(14)は、「入隊する」という動詞を用いながら(14b)、(14c)のように、入隊した場所や、時間を特定することはできない。

- (14) a. nə- pè =gō əpu' dap-ta' cīlcè wa' -shì -ē.  
2.GEN- 父親 =[累加] ジンポー 軍隊-LOC 入隊する -shì -NPST  
「あなたの父親もジンポーの軍隊に所属している。」
- b. \*nə- pè =gō bəmò -ta' əpu' dap cīlcè wa' -shì -ē.  
2.GEN- 父親 =[累加] バモー -LOC ジンポー 軍隊 入隊する -shì -NPST
- c. \*nə- pè =gō sáni -ta' əpu' dap cīlcè wa' -shì -ē.  
2.GEN- 父親 =[累加] 昨日 -LOC ジンポー 軍隊 入隊する -shì -NPST

以上の指摘から、-shìは事象が継続・恒常・反復的であることを示す機能があると言える。そして同時に、事象の一回性、特定性が低めるという機能も認められる。他動性の視点から言い換えれば、-shìが事象の継続・恒常・反復性を高め、一回性、特定性を低めることで、他動性が弱まり、形態統語的に自動詞文で表現せざるを得ないと解釈できる<sup>4</sup>。

## 6. 結論

-shìは再帰の意味を積極的にコード化する接辞というよりむしろ、他動性を低める接辞であるという一般化ができる。つまり-shìに標示されることで、対象の独立性、或いは、事象の特定性、一回性が低まり、他動詞文で表現できなくなる。先行研究の指摘する「中動・再帰」の意味をコード化するのは、対象の動作主からの独立性が弱まった結果、生まれた意味であるといえる。

## 7. おわりに

最後に歴史的な視点から-shìの「他動性を低める機能」を概観する。

ラワン語は、Matisoff(2003)他によって、ヌン語支という言葉グループのひとつをなすという指摘がある。ヌン語支の成員はラワン語の他、ドゥロン (Dulong)、アノン (Anon) である。それぞれ、ミャンマーのカチン州と中国の雲南省の境に沿って分布しており、分布地域は接している<sup>5</sup>。ヌン語支の他の言語にも-shìの同源形式は存在する。それぞれ、分布に微妙な違いはみられるものの、「他動性を低める」という性質を共有しているといえる。

<sup>4</sup> 「再帰らしくない」-shìの場合、本来的に他動詞であるものに付加されるだけではなく、自動詞に付加される例も確認できる。(i)において、動詞は ip「寝る」という自動詞の形式を持つにもかかわらず、継続的に寝ていることを示すために-shìが付加されている。

(i) sáni -kēni àng ip -shì -ē.  
昨日 -ABL 3SG 寝る -shì -NPST  
「彼は昨日からずっと寝ている。」

(i)のような例は「再帰らしくない」-shìの分布が拡張した結果、生まれたと考えられるが、用例が少なく、更なる検証が必要である。

<sup>5</sup>ヌン語支の3言語に関する包括的な情報については Randy LaPolla 氏が運営するサイトを参照されたい。

<http://tibeto-burman.net/> (最終閲覧日 2014年4月29日)

表 1: 系統的に近い諸語に見られる対応形式

言語	ドゥロン	アノン	ラワン
参照した記述	Sun(1982) Liu(1988)	Sun & Liu(2009)	
形式	-eũ	-eu <sup>31</sup>	-shi
再帰代名詞	有	有	無
意味機能	・ 中動	・ 有対動詞の自動詞側の語形に残る。 ・ 相互	・ 中動／再帰 ・ 継続／反復／習慣

ヌン祖語には他動性を低める接辞があり、それぞれの言語に分かれる段階で、「他動性を低める」という性質を残しながら、意味が分かれていったと考えられる。その中で、ラワン語は、再帰代名詞を持たないという特徴によって、中動・再帰的な意味を実現するようになったと推測できる。

### 略号一覧

1: 話し手人称	CL: 類別詞	PFV: 完了
2: 聞き手人称	COP: コピュラ	PL: 複数
3: 第三者人称	COP: コピュラ	PN: 固有名詞
-: 接辞境界	GEN: 属格	POT: 可能
=: 接語境界	HS: 伝聞	SG: 単数
∴: イントネーションユニットの境界 (転載例文の場合は元の例文のまま)	INST: 道具格	TNP: transitive non-past 他動詞非過去
ABL: 奪格	LOC: 処格	TP: transitive past 他動詞過去
AGT: 動作主格	NPST: non-past 非過去	

### 参考文献

- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle voice. Typological Studies in Language* 23. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Liu, Juhuang (1988) *Dulongyu dongci yanjiu (Studies on the Dulong verb)*. *Yuyan Yanjiu* 1988.1.
- LaPolla, Randy John (2000). Valency-changing derivations in Dulong/Rawang. In Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, Alexandra Y. (eds.), *Changing valency: case studies in transitivity*, 282-311. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matisoff, James (2003) *Handbook of Tibeto-Burman: System and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. University of California Publications in Linguistics 135. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.
- 大西秀幸 (2013) 「ラワン語ダル方言の音韻」東京外国語大学記述言語学研究室 (編)『思言: 東京外国語大学記述言語学論集』 pp. 3-22.
- Sun, Hongkai (1982) *Dúlóngyǔ jiǎnzhi (A sketch of the Dulong language)*. Beijing: Minzu Chubanshe.
- Sun, Hongkai and Guangkun Liu (2009). *A Grammar of Anong. Language Death Under Intense Contact*. Boston: Brill.